

Book Review 36-6 誘拐 #報道協定

『#報道協定』（初瀬礼著）を読んでみた。著者は2013年、『血讐』で第1回日本エンタメ小説大賞優秀賞を受賞しデビュー。

某テレビ局の敏腕記者Mは、IT界の風雲児Yの息子が誘拐されたという事件の発生を知る。本書は、過去と現在に起きた二つの誘拐事件を扱っている。

14年前の12月、総合病院の理事長の小学校一年生の息子が誘拐された。C県警と報道協定を結び、一切の取材・報道を控えることになったが、誘拐を知ったYという人気ブロガーが、誘拐のことをブログに書き込み、それをネットニュースが報じてしまう。協定の意味がなくなり、雪崩を打ったように各マスコミも誘拐を報道することに転じる。その結果、犯人は後に逮捕されたものの、誘拐された子供は報道の直後にパニックになった犯人によって殺されてしまった。

それから14年後の12月にまたも誘拐事件が起きる。IT企業の社長Yの長男で幼稚園児が自社ビルの中に設けられた託児所から忽然と姿を消してしまったのだ。

二つの誘拐事件は関連があるのか。警察も進行中の事件が、過去の誘拐事件と接点があることをつかむ。密室と思われるエレベーターから人質幼児は消失したかの如くに思える、人質幼児の誘拐方法は？ 犯人は誰で？ 人質は無事解放されるのか？

誘拐事件といえば、吉展ちゃん誘拐殺人事件がまず思い浮かぶ。本書のタイトルとなっている報道協定は、この事件で初めて結ばれたモノであり、被害者保護の観点から誘拐事件の際には報道協定を結ぶ慣例が生まれたそう。

誘拐を扱った小説といえば、『#罪の轍（わだち）』（奥田英郎著）を読むことをお勧めする。1963年10月、東京浅草で男児誘拐事件が発生。若手刑事の活躍、近隣に現れた北国訛りの青年。一刻も早い解決を目指す警察はやがて致命的な失態を演じる。憔悴する父母。公開された肉声。吉展ちゃん誘拐殺人事件を彷彿させる犯罪・捜査小説である。

現在では誘拐は割の合わない犯罪（お金と人質の受け渡し）に思える。私には60年前の東京を舞台にした『#罪の轍』を読んだときの緊張が忘れられない。